

学生からの「質問」を活用して、 クラス全体の理解度向上を図る

2017年度秋学期ティーチングアワード受賞

対象科目：Fixed Income Investments

大学院経営管理研究科「MSc in Finance (Master of Science Finance) プログラム」の1年生以上を対象とした、必修コア科目「Fixed Income Investments」。債券や金利デリバティブなどの各種付証券の分析と運用を中心に、金融プロフェッショナルに求められ膨大な知識やスキルを効率よく、かつ深く理解してもらうために、四塚教授はベーシックな講義形式の中にもさまざまな工夫を施している。



四塚利樹

商学大学院教授

学生たちの母語が英語でないことを意識して授業を進める

2016年度からスタートした「MSc in Finance プログラム」は、金融業務や企業財務などで必須となるファイナンスの知識やスキルを備えた人材の養成を目的としている。特徴のひとつは、すべての授業が英語で行われることだ。2017年度の「Fixed Income Investments」の場合は、24名の学生全員が海外からの留学生だという。国籍は、最も多いのが中国で、他にドイツ、イタリア、オランダ、ベトナム、カザフスタンなど多岐にわたる。

そのため、授業の際には表現に気を遣うこともあると四塚教授は語る。「ネイティブ・スピーカーでなくても学生の英語レベルはかなり高く、通常の表現であればまず問題はありません。それでも、たとえばアメリカの大学で使うような凝った表現や冗談などは通じない可能性があるため、誰にでもわかりやすい表現を使うように意識しています」。

さらに、パワーポイントによる詳細な講義資料を用意することで、「言葉がわからなくて理解できない」ということがないようにしている。

また、言葉だけでなく、債券やデリバティブなどの市場の構造もそれぞれの国によって異なる部分がある。これについては、どの国でも通用するユニ

バーサルな分析ツールを中心に置つつ、具体的な例としては主にアメリカの債券市場を使って説明するようにしているという。「簡単に言うと、アメリカの債券市場が最も発達していて発行量が圧倒的に多く、実証分析の蓄積やデータも豊富だからです。日本がそうであったように、将来的にはほかの国もアメリカのようになっていくと考えられるので、アメリカをベースに説明しています」。

「質問」を活用したやり取りが、 授業の高い評価につながった

「Fixed Income Investments」の授業は、ベーシックな講義形式で進められる。授業では、パワーポイントで作成した資料を配布し、それをスクリーンに映しながら説明していく。資料は事前にCourse N@viにアップするが、予習は必須にはしていない。「授業の進め方自体はそれほど変わったところはないと思います。ただ、授業中の質問がかなり活発で、その点は授業の特徴と言えるかもしれません」。

四塚教授によると、今回ティーチングアワードを

受賞したクラスでは、少数ながら特により質問をする学生達がいたとのこと。

「彼らはもともと金融に詳しく、突っ込んだ質問をすることがよくありました。一方、クラス全体としては学部を卒業したばかりで実務経験がない学生が多く、また学部時代にエンジニアリングなど金融以外を学んだ学生もいます。そのため、学生によって金融の知識にはバラつきがあったのですが、質問をきっかけにしてクラス全員の理解をより深めることができたと考えています」。

突っ込んだ質問が来たときには、質問自体の意味がわからない学生もいるため、まず質問の内容を四塚教授が説明。普段授業でするのは違った角度から解説したり、学生たちとやり取りしたりしながら進めて、最後に質問に対して答えるという流れだったそうだ。「ティーチングアワードでは学生授業アンケートなどで高い評価をいただきましたが、その理由のひとつは、学生からのよい質問を授業に活用した点にあったかもしれません」。

ちなみに、この授業では学生同士のケース・ディスカッションは行わないそうだ。理由はシンプルで、「金融プロフェッショナルとして知っていなければいけない大量の知識や数学的・統計的スキルを身につけていない段階で議論をしても、まったく意味がないからです」。まずは、とにかく基礎を固めること。だからこそ、講義形式で知るべきこと・覚えておくべきことをできるだけ効率的に詰め込み、学んだ知識を使いこなせるように練習問題などで訓練を積んでいるという。

知識やスキルに加えて、 「センス」も授業の中で伝えていく

「Fixed Income Investments」の授業では、金融プロフェッショナルに求められる知識やスキルを身につけることが目標だ。ただし、金融のプロを目指すには、知識やスキル、ノウハウだけでは不十分で、それらに加えて「センス」が必要になるという。

「センスとは、たとえばマクロ経済環境や金融政策が変化したときに、『じゃあ金融市場ではこの先こういうことが起きそうだから、それをこうやって収益化しよう、こういうリスクにも気を配っておこう』といった感覚のことです。そうしたセンスがないと、誰かが作った金融商品を販売することはできても、自分で新しいアイデアに基づいてプライシング・モデルを改良したり、金融商品を開発したりする側にはなれません」。

そこで四塚教授は、投資銀行などでの自らの実務経験も踏まえながら、授業の中で学生たちに「センス」を伝えることにも取り組んでいる。その方法の一つが、金融市場が過去に経験した大きなショックや重要なエピソードを話し、市場参加者が共有する「経験知」を知ってもらうことだという。

「たとえば、1997年のアジア危機、1998年のロシア危機、2000年のITバブル崩壊、あるいは2008年のグローバル金融危機など。そのときに、どこでどのようにリスクが高まり、金利はどう動いたのか。起きた現象とその理由を知ることが、『センス』を身につけることにつながっていると思います」。

今後検討すべき事柄としては、授業の工夫の一つである「学生からの質問」を挙げる。

「質問を活用して学生たちの理解を深めるというやり方は、学生次第のところがあります。仮に、質問が活発に出てこない学生ばかりのクラスだったらどうするのか。現在の授業は、内容をかなり詰め込んでいますが、それを少し減らす形で学生に対して問いかける時間を増やすのも一つの方法かもしれません。質問を待つのではなく、こちらから『これについてどう思う？』と聞いてその場で答えを考えてもらう。どんなやり方が効果的なのか、まだまだ工夫の余地があると思っています」。

